



藤沼悟

CV:土屋太鳳(昭和63年)

満島真之介(2006年)

29歳、漫画家。2006年現在はピザ屋にてアルバイト中。他人との間に距離を置き、深く関わることを避ける性格のようで、それが災いしてか漫画家として今ひとつ芽が出ない。リバイバル(再上映)という現象に悩まされており、それがために様々なトラブルを回避してきた。だが、母親を殺害された後にこれまで経験したことのない大きなリバイバルに遭遇。昭和63年へと飛ばされることになる。



ヒーローのお面

悟の回想にたびたび登場するヒーローのお面。昭和63年当時の悟の家にも飾ってあった。このヒーローは、彼にとって特別な存在であるようだ。

SATORU FUJINUMA



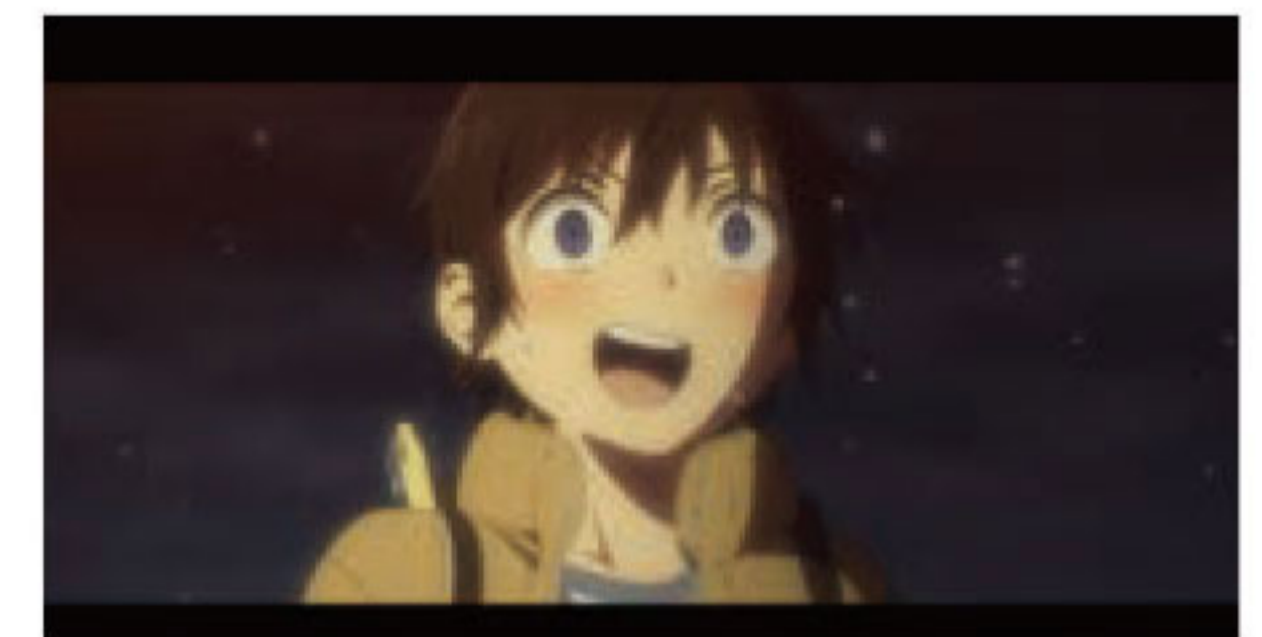
リバイバル

悟を訪れるリバイバルという現象は、過去に戻ってやり直しが利くという意味で、トラブルの回避にはこれ以上ないほどの武器になり得る。だが18年もの時を隔てたリバイバルは、悟にも初めての経験のようだ。大人の知識を持ったまま小学生時代をやり直すことは、事件解決に有利にはたらくように見えるが…。



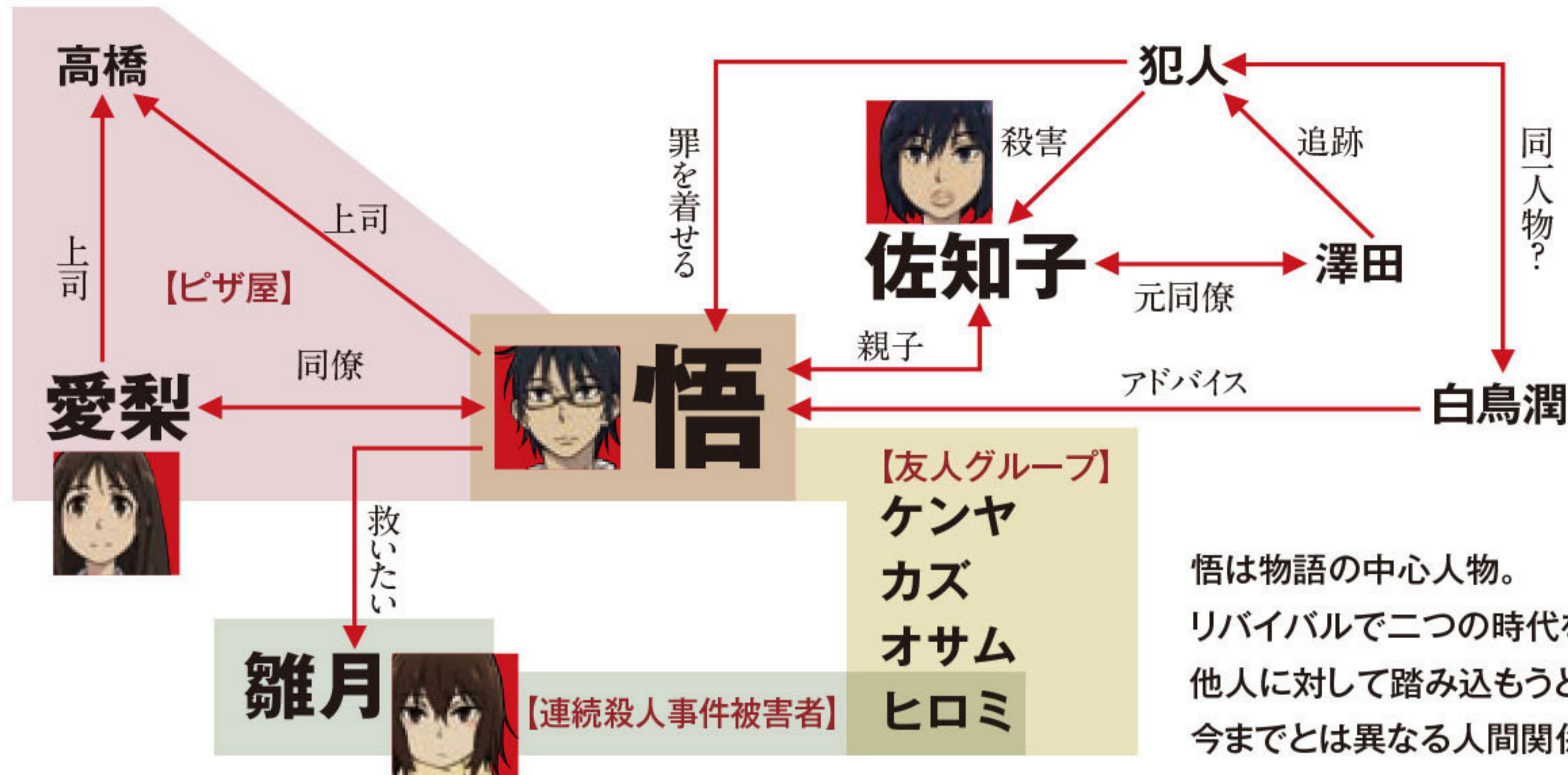
踏み込むということ

「雛月に声をかけていれば助かったかもしれない」という幼い頃の後悔から、いつの間にか「踏み込めない」大人になってしまっていた悟。傷つくの怖れるその防衛的心理は、子ども時代の心の傷の大きさの裏返しでもある。しかし昭和63年へのリバイバルによって、彼は意識的に「踏み込む」行動をとり始める。



「声に出た…」

人に踏み込めない一方で、悟は内心で思ったことを、不用意にそのまま口に出してしまうクセがある。だが、逆にそれがいい結果を生むことも。



悟は物語の中心人物。
リバイバルで二つの時代を行き来している中、
他人に対して踏み込もうという意志を持ったことで、
今までとは異なる人間関係が生まれている。



【藤沼悟を中心とした事件整理】

藤沼悟は、2006年現在、母親である佐知子殺害の容疑者であり、警察から逃亡している身だ。同時に、リバイバル後の昭和63年においては彼自身が事件を追う主体でもあり、複雑な立場に置かれている。リバイバルし、18年前に起こった連続殺人事件が母親の死の起点になると考えた彼は、最初に狙われるはずの雛月加代を生存させることで母を救おうとする。だが、結果雛月は殺害され、歴史改変は失敗。そのため再度2006年に戻ることとなった。その後、ルポライター・澤田と愛梨の協力によって、狡猾な犯人の人物像とやり口を知り、西園という男へと辿りつくが、警察に捕まってしまう。そして――。



昭

第一話 走馬灯

藤沼悟。29歳。彼は自身の周囲で起こる不思議な現象「リバイバル（再上映）」を引き金に、アルバイト先で交通事故に遭ってしまう。幸い軽傷で済んだものの、心配してやってきた母親の佐知子と同居することに。二人で行ったスーパーの帰り道、佐知子はある異変を察知し、かつて起こった連続殺人事件の犯人へと行き当たる——。しかし、その犯人の名を告げる前に、彼女は何者かに殺害されてしまうのだった。帰宅した悟は、その姿を目撃され容疑者として警察に囲まれる。必死の思いで逃げ出した彼の前には、目を疑う風景が広がっていた。そこは18年前。かつて幼少時代を過ごした、昭和63年の北海道で——。

STAFF

脚本:岸本 卓
絵コンテ/演出:伊藤智彦
作画監督:佐々木啓悟



悟が帰宅直前にすれ違ったのは、佐知子を刺殺した帽子に眼鏡の男。佐知子は事切れる前に何かを確信していた。18年前の事件との繋がりは……？

KEYWORD

【悟と佐知子】

そのぶっきらぼうな接し方から、悟は佐知子に対して少し距離を置いていたことが推し量れる。佐知子がしばらく滞在することへの悟の驚きを見ると、上京した悟のアパートを訪れたことがなかったのかもしれない。

【平成生まれのジョークか】

愛梨の冗談めいた言葉を聞き、「平成生まれのジョークか」と言う悟。この物語の起点は2006年であり、平成生まれで高校生はまだ少なかった。

和63年……？

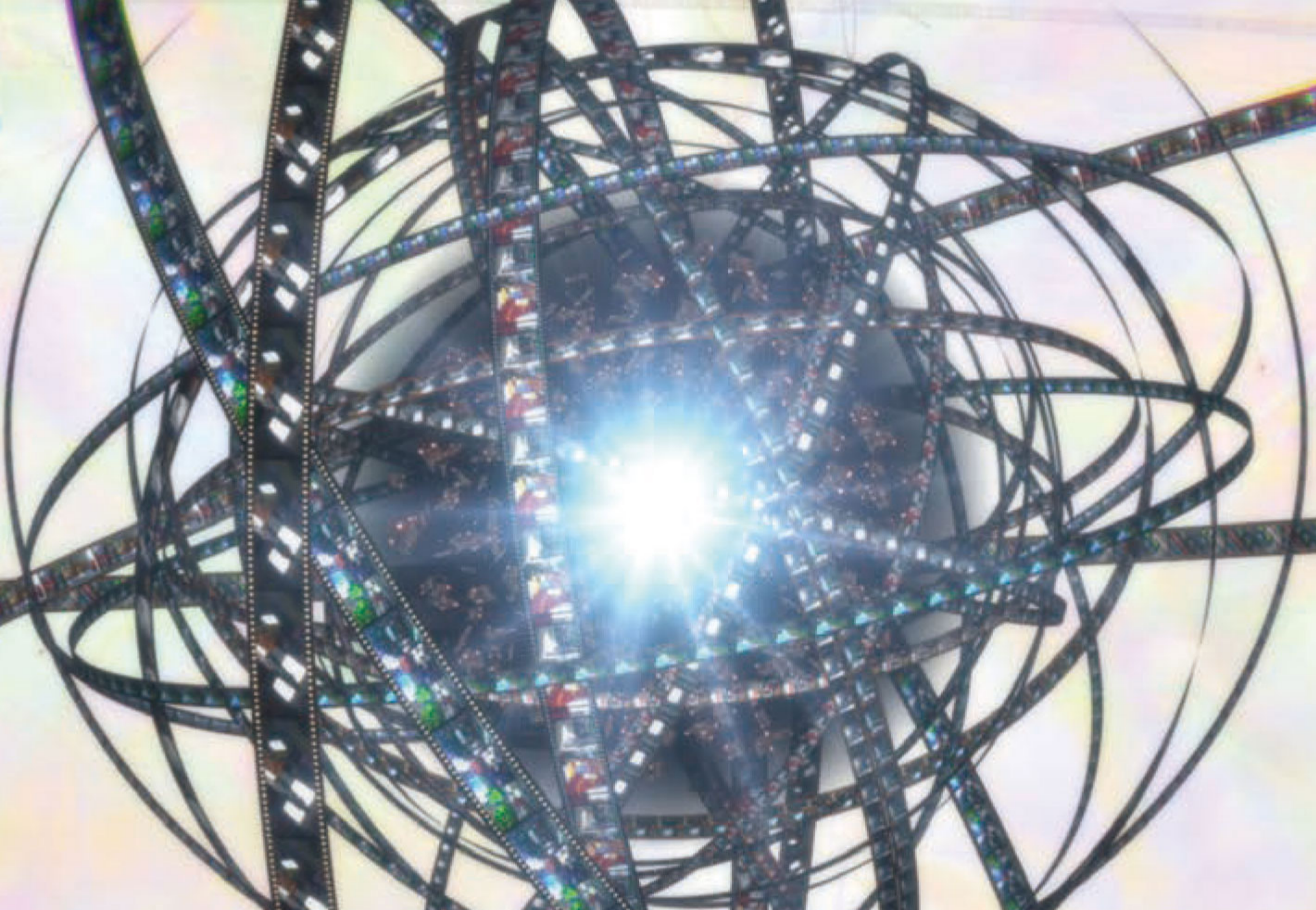


リバイバルによる交通事故をきっかけにして、徐々に記憶の蓋が開いていく悟。母親の話から、昭和63年の小学生連続誘拐殺人事件について思い出し、改めて調べてみることに。



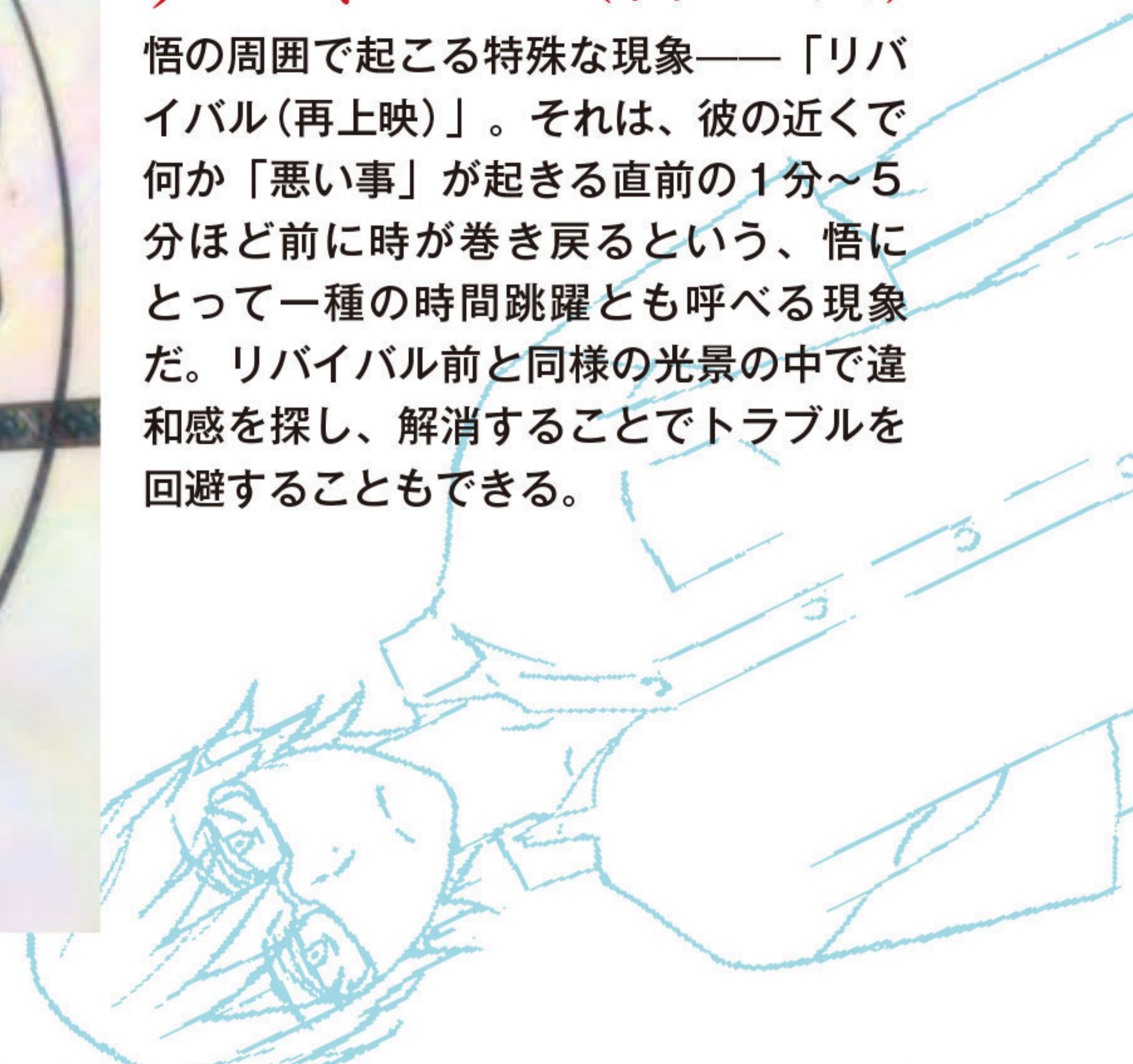
佐知子と二人で行ったスーパー前でリバイバルが発生。アイスをとす子供、宙に舞う風船——だが違和感は見つからない。悟はついに佐知子に協力を乞う。辺りを見回した佐知子が見たものは……!?





リバイバル(再上映)

悟の周囲で起こる特殊な現象——「リバイバル(再上映)」。それは、彼の近くで何か「悪い事」が起きる直前の1分～5分ほど前に時が巻き戻るといふ、悟にとって一種の時間跳躍とも呼べる現象だ。リバイバル前と同様の光景の中で違和感を探し、解消することでトラブルを回避することもできる。



リバイバルが起こった場合、必ずどこかにある「違和感」。それが、「悪い事」を引き起こす原因だ。



リバイバルによって何度もトラブルを回避してきた悟。だが、第1話で交通事故に遭ってしまったように、時に自身にとってマイナスになることも……。



第1話の最後に起こったリバイバルは、18年前に戻るといふ、これまで悟自身が経験したことのないほどの大規模なものだった。

北海道小学生連続誘拐殺人事件



18年前、悟の住んでいた北海道にて起こった事件。その容疑者となったのは、悟に対し親身に接してくれたユウキさん(白鳥潤)だった。悟は当時、彼が犯人ではないと主張したが、大人たちはそれを取り合わなかった。

未遂に終わった誘拐事件



スーパーの駐車場で、突如発生するリバイバル。佐知子は少女と一緒に歩いている男に「見られていた」と感じ、注意を向ける。佐知子の視線に気付いた男は、少女を置いて立ち去るが……。

KEYWORD

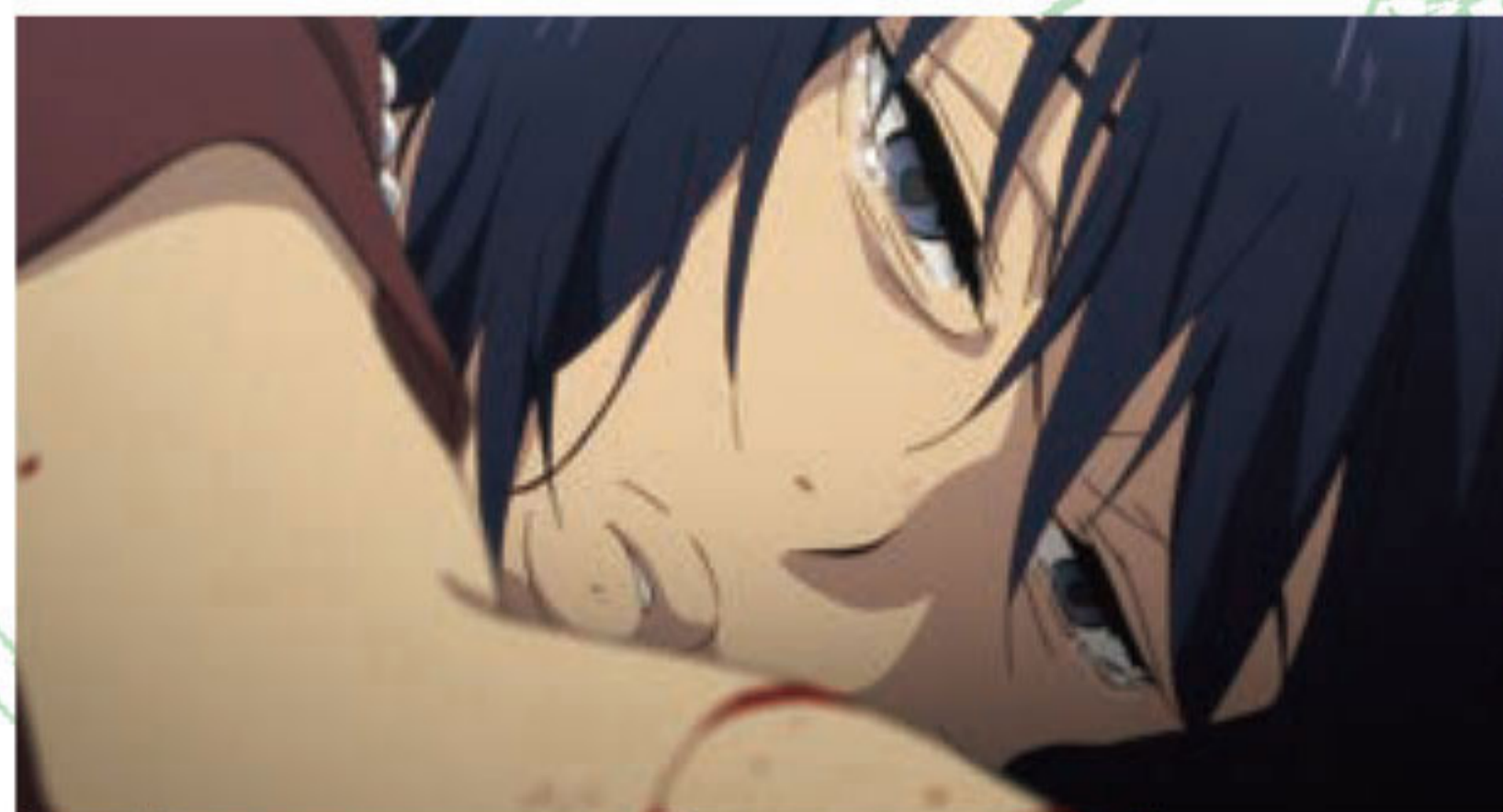
【クラスメートが二人いなくなったんだった】

佐知子から誘拐事件の話を知り、その時のことを思い出そうとする悟の言葉。ひとは第1話で雛月加代という少女だと判明するが、もうひとは……？

【佐知子の持ち物】

佐知子が持っていた紙のメモは、自宅に戻ってきた悟が回収。また、携帯電話は犯人と思しき男が持ち去ってしまった。

佐知子殺害



自分を見ていた男に覚えがあった佐知子は、思案を巡らせた末、18年前の連続誘拐殺人事件に関連した人物に行き当たる。だが彼女はそれを誰にも告げることができないまま殺害されるのだった。

容疑者は悟?



帰宅した悟を待っていたのは、佐知子の亡骸だった。愕然とする悟は、その姿を大家に見られてしまう。直後、考える間もなく警察が悟の自宅を取り囲み、彼は佐知子殺害の疑いをかけられるのだった。

■制作こぼれ話

佐知子が読んでいる新聞などの「貼り込み素材」は、結構こだわっています。当時の世相を反映した記事も入れ込んでいますが、よく読むとちゃんと雛月の事件の詳細が書かれていたりするんです。後の話数まで見てもらって、また最初に戻ってもう一度見ると「ああ、そうだったのか」と思えるような工夫を、細かいところにもしているつもりです。

藤田祥雄(制作デスク)&渋谷晃尚(設定制作)

『僕だけがいない街』 絵コンテのトリック

アニメーションを制作するにあたっての映像設計図とも呼ばれる「絵コンテ」。脚本の次の工程となるこの作業によって、映像を構築していく道筋がほぼ決定する。この設計図を辿ることで『僕だけがいない街』がどのような意図をもって演出されていったのかを確かめることができる。

ぐあーと
きこくと

先ほどの場面が
場面字のように
運んでいる。

値N
「大体1分から5分くらい前に戻って
同じ光景を見る……」

第一話 走馬灯

絵コンテ担当:伊藤智彦

【シネスコ(シネマスコープ)フレーム】

リバイバル後の映像は、ビスタ(1.66:1)からシネスコ(2.35:1)に、フレーム比率が変わっている。これは過去に戻ったことと、どちらの時代で何が起こったのかを明確にするための演出だ。映画を意識したこの処理は、回想シーンで使われる、様々なフィルムが散りばめられた悟のイメージ空間にも通ずるものがある。また、このシーンではマンガのコマを貼り付けることで、原作を再現する指示を明確にしている。

294

黒味をいじ
①
②
③
④

通り(場面字)
またまた何回か
の場面字

Fallin
しおし

同じ、空の
通りの光景がなが
る

⑤
⑥

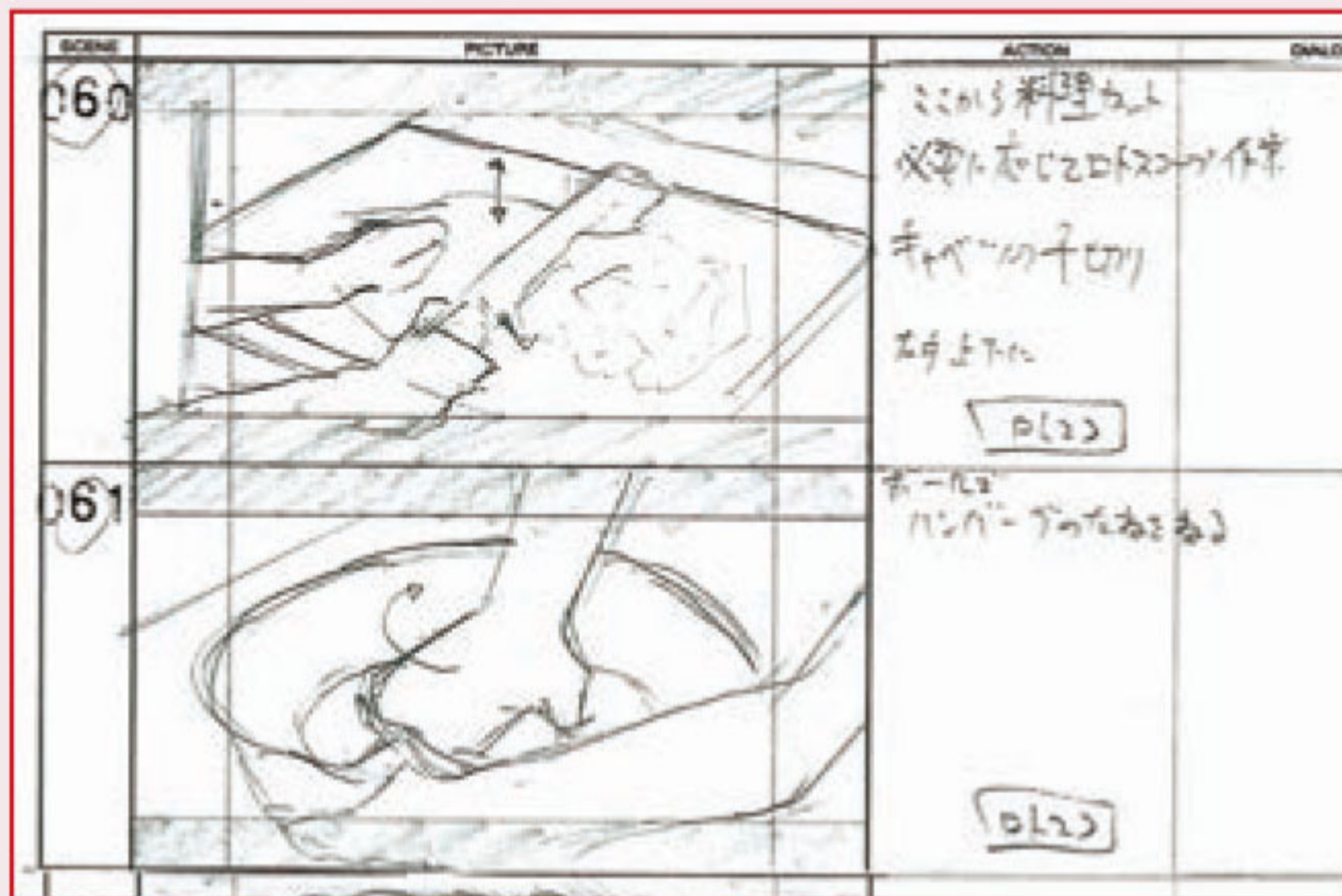
値M
「……場面17
もどったのか……17」

100% [2 + 18]



【同ポ・兼用】

あるカットと同じポジションにカメラを据え、同様の構図を繰り返して使用することを同ポ(同ポジション)と呼ぶ。絵素材を兼用できるため省力化にも繋がるが、安易に使用すると手抜きに見えかねない。本作では時間跳躍をしている表現として、あえて同ポを使用。悟が同じ時間を繰り返していることが、より視聴者に説得力を持って伝わってくる。

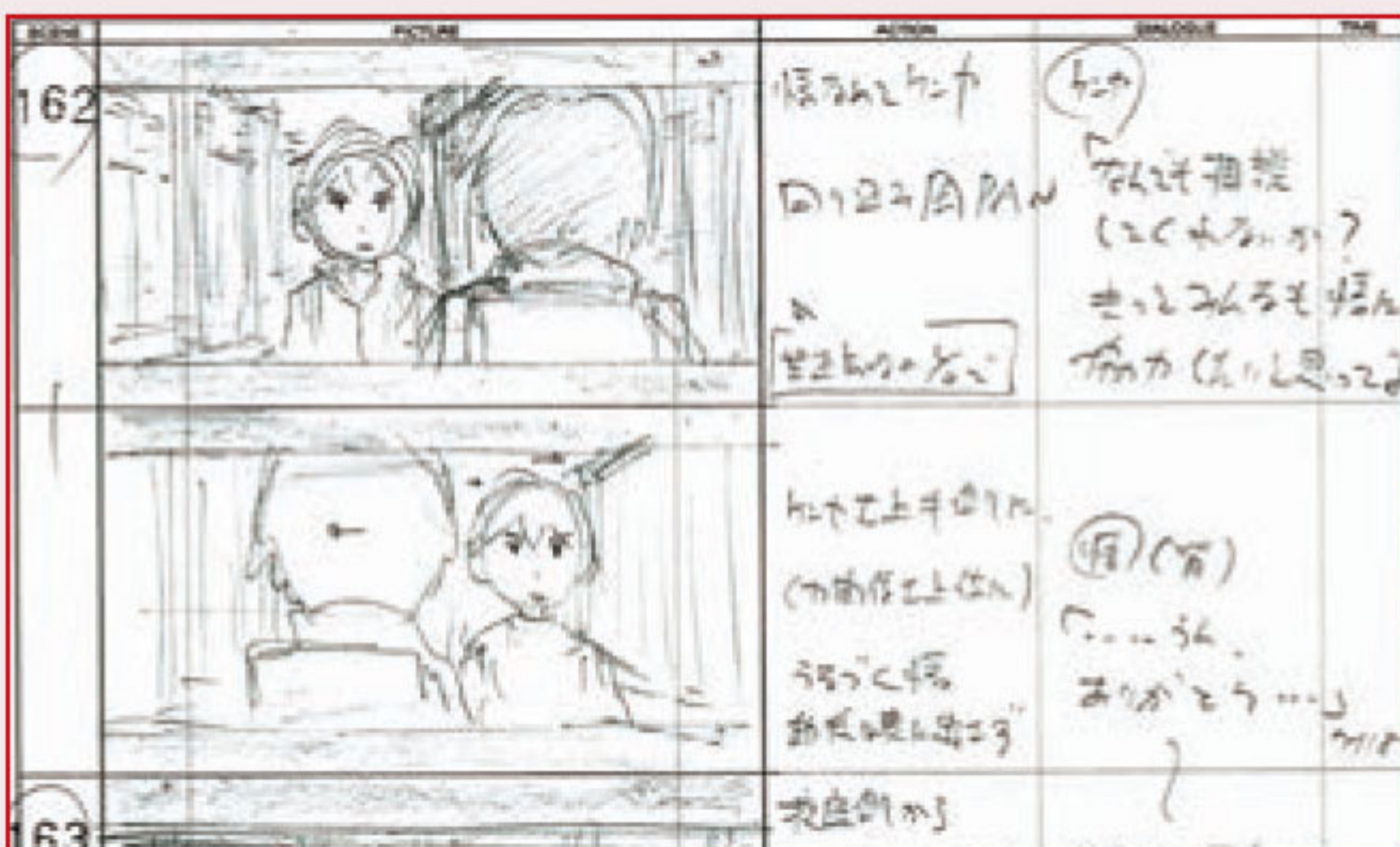


【ロトスコープ】

CUT60にて「必要に応じてロトスコープ作業」とある。ロトスコープとは、実在のモデルの動きを撮影、トレースし、アニメーションとして使用する手法のこと。このシーンは、調理中の手元にロトスコープを使用することで、母親の实在感を深め、視聴者に「温かみのある特別なカット」として認識してもらおうという意図が見える。

第二話 掌

絵コンテ担当:石井俊匡



【上手と下手の入れ替え】

悟とケンヤを望遠気味に映しているこのカット。カメラがふたりを回り込むように動くことで、悟を挟んでケンヤが左手から右手へと移る。これは舞台における下手から上手への移動と同様の効果を狙ったもの。力関係が強いほうが上手に来るといふ舞台劇的な演出のメソッドで、そのまま悟の緊迫した胸中を表している。

『僕だけがいない街』

三部けい × 松宮庸典インタビュー

(原作)

(担当編集)

自分が大事にしている部分が損なわれず、アニメも作られるんだと思いました(三部)
スピリットとして、アニメは完全に漫画と同じだと思っています(松宮)

出会いはコミックマーケット

— そもそも、三部さんと松宮さんが初めて出会ったのはどこだったのですか。

松宮 最初にお会いしたのは、コミックマーケットだったと思います。

— それはまた、面白い場所ですね。

松宮 はい。兼処敬士(かねさだけいし)さん【注1】にご挨拶に行った時「三部です」とご紹介を受けたのが最初かと。その後、10年間くらいただお話ししたりする仲という関係性がずっと続いていたんです。

— 三部さんは同人誌イベントがお好きなのですか？

三部 ええ。人に会いに行く感というのが凄く楽しかったんですよ。友達に会うために出るというのも大きかったです。とはいえ、最近は忙しくてコミケもずっと出ていないんですけど。

— それほど忙しいと同業者と会う機会もないのではないですか。

三部 今は誰にも会わないです(笑)。だから、こういったインタビューがあると楽しいんですよ。

松宮 この2年くらいはその状況が加速しているみたいな感じですよ。

— 後書きで書くこともなくなっていますね(笑)。

三部 家の中のことと子供のネタばかり増えるっていう(笑)。



三部けい作品恒例の後書き「非日常的な日常」は、コミックスにおけるお楽しみのひとつでもある

『僕だけがいない街』シリーズ構成

岸本卓インタビュー

人間の心情をしっかりと描こうというのは、
本読みの場でも共有されていました

●PROFILE

岸本卓

「サイゾー」編集部、スタジオジブリを経た後、脚本家として様々な作品に携わる。代表作に『うさぎドロップ』『銀の匙 Silver Spoon』『ハイキュー!!』『プリンス・オブ・ストライド オルタナティブ』(いずれもシリーズ構成)などがある。

魅力的な原作だけど、映像化は困難だと思った

—— 『僕だけがいない街』が放映されて少し経ちましたが、まず実際にご覧になられた感想から伺ってもよろしいですか？

岸本 いやあ、自分の予想を遥かに超えたものに仕上がっていました。第1話を見て、この作品に参加できてよかったと、心から思いました。この原作は映像化するのがかなり難しいと思うんですね。ともすれば、地味になってしまいそうで。それをここまで映像で引っ張れたのは伊藤さんをはじめ、絵作りに関わったスタッフの力だと思います。

—— 相当良い出来だと思えたんですね。ではそのあたりの詳しいお話は改めて伺うとして、まずは『僕だけがいない街』のシリーズ構成を担当されることになった経緯を教えてくださいませんか？

岸本 声掛けがあったのは、『銀の匙 (Silver Spoon)』の脚本作業が終わった頃だったと思います。伊藤さんから「次の企画も一

緒にやりましょう」といった感じで。

—— その時にタイトル名は出ていたんですか？

岸本 いえ、聞いていませんでした。正直、最初はかなりふわっとした話だったんです。社交辞令なのかオファーなのか、わからないくらい(笑)。そのあと、伊藤さんから直接電話があって「そろそろ本読みに入りませんか」と。「あ、やっぱり本当にやるんだ」といった感じでした。そんなわけで、まず伊藤さんと飲みに行って、どんな作品にしたいかという考えを聞いて構成を立て、会議を始めるという流れでした。

—— そのあたりで原作を読まれていると思いますが、第一印象はどんなものでしたか？

岸本 サスペンス要素を強く感じました。“引き”が強いなど。原作第1話のラストは、クラスメートだった女の子(雛月)が死んだことを思い出すところで終わっていたんです。まず、そこが面白かったですね。「この子を救おう」じゃなくて、「死んだ」から始